はじめに

WIDE プロジェクトのメンバーが研究対象としている領域において、ほとんど例外なく大きく現実的な研究成果を生み出しており、その結果が新しい課題を導き、より充実した研究へ結びついている。このような好循環があればこそ 15 年もの間 WIDE プロジェクトの活動を成長的に継続できたわけで、2002 年度の研究報告書をお届けするこの機会に、改めて、多大なご支援とご理解をいただいた方々に深く感謝する次第である。

しかしながら、研究領域の多様化、テクノロジの対象の拡大、多数の新分野とのハイブリッド化といった急速な発展を遂げるデジタルテクノロジの分野の先端研究分野を開拓するための斬新な視点と、挑戦へのエネルギーを融合するためには、プロジェクト全体のステアリングを新しい力で支える必要がある。そこで、WIDE プロジェクトでは、これを目指した新しい体制への検討を重ね、2002 年 9 月にそのゆるやかな離陸を開始した。

具体的には、従来の 20 人のボードメンバーによるプロジェクト全体のステアリングに加えて、6 分野 12 人の分野別「研究ディレクタ」（エリアディレクタ、AD）の設置と就任をお願いし、集中的に研究活動そのもののモニタと支援をお願いすることにした。今年度の活動を締めくくる 2003 年 3 月に行われた春の合宿ではこの AD たちの大活躍をみることができた。順調な滑り出しのように見えるが、この新体制が研究成果に結実するためには、プロジェクト全体での活発な議論と試行錯誤が必要である。9 月期の報告会までには、まとまった私たちなりの評価をお伝えできると思う。新しく AD をつとめていただいているメンバーの熱心な議論を頼もしく思うとともに、彼らの活動を見守り支援していただいている関係者の方にも深く感謝したい。

国際的な側面では、昨年アジア圏で初めて開催された横浜 IETF において、IETF での IPv4 から IPv6 への体重の移行は終わったように見えるとともに、具体的な課題への取り組みが本格的に開始された。AD メンバーのいとじゅんこと萩野純一郎氏は IPv6 運用ワーキンググループの座長となり、更に、IAB(Internet Architecture Board) の一員となった。1992 年に私が就任して以来 11 年目の出来事である。他の二人の IETF での座長や ITU や ISO で活躍するメンバーも含め、WIDE プロジェクトでの議論と活動から生まれた信念に基づく成果が、より広い貢献に結びつくためのビークル（乗り物）が整ってきた。

大規模広域分散環境としてその理念を追求してきた WIDE プロジェクトの研究は、インターネット基盤の確立に加え、RFID のような新しい電子デバイスとの融合の中で、より明確な前進を期待できるようになった。また、社会への展開に必要な国内外での社会活動にも多数のメンバーが活躍している。さまざまなプロジェクトの活動を通じた、十分な議論とコミュニケーションが、より楽しく充実した研究活動を可能にし、その成果のより大きな貢献へとつながる。

技術が人と社会に大きく貢献するときこそ、その技術は人と社会に大きな恐れをいだかせる。この恐れを乗り越えて、人と社会が技術を受け入れるためには、明るく楽しく、新しい技術を作り上げ、これに私たち自身が感動することしかないと考えている。「北風と太陽」は、WIDE プロジェクトが始まったときからの活動のアナロジであり続けたが、「実空間のためのインターネット」に挑戦する 2003 年度の WIDE プロジェクトにとって、太陽の明るさは極めて大切な研究姿勢である。

2003 年 3 月 13 日

WIDE プロジェクト代表
村井　純